

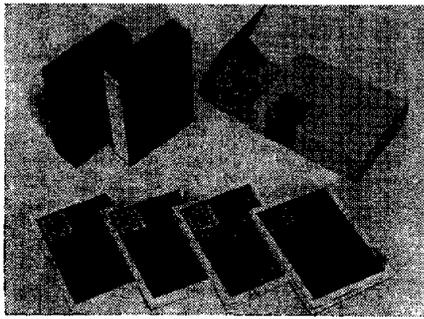
「自然」のこと

「文化」のこと

そして

雑誌「樹」のこと

小 高 遠 雄



私は「自然保護」という言葉が嫌いです。自然を破壊し続けてきた人間が、今になって自然を保護しようと言うことの裏には、これ以上の破壊を続けていくと、人間自体がもはや生きていくことが出来なくなることに気がついた、ということがあります。それならいっそ「自然保護」などと言わずに「人間保護」と言った方が正直ではないかと思えます。自然は、人間が保護しようとしまいと、たとえ砂漠となっても生きています。生きて行けなくなるのは人間のほうで、そんな人間が自然を保護するなどと言うのは思い上がりだと考えています。誤解のないよう、念のために申しておきますが、私は「自然保護運動」が間違いだと言っているわけではありません。「保護」という言葉が嫌いだと言っているだけです。といって他に適当な言葉も見当りませんが、それはそれでいいのですが、考え方はけはしっかりしておきたいと、自らに言いさかせているだけのことです。

人間は本来自然の一部であり、自然の大きなふところの中で、他の動植物と一緒に生きさせて貰っているに過ぎません。その自然への畏れと愛を忘れ、科学の進歩によって自然の改変が意のままであると思いつたところに、われわれの間違いがあったはずで、そしていま、破壊し過ぎてこれ

では生きられなくなるから保護しようという、破壊の裏返しで保護が叫ばれているようなことではないでしょうか。しかもこれまでの自然破壊によって築かれた文明（特に都市生活）の快適さは一切手離すことなく、一方では引き続き破壊に加担しながら、一方では保護を唱えているというようなことではないでしょうか、たとえば相変らず車を乗り廻して大気汚染に拍車をかけながらゴルフ場やスキー場などのレジャー施設や車のための観光道路の開発は止むを得ないとし、本当に山を守る人々のための林道は自然保護の名のもとに差しとめる、というようなことは行われていないでしょうか。

昭和三十年頃、国の天然記念物に指定されて保護されたニホンカモシカが、当時は全国で三千頭ぐらいたったものが現在では七万頭にもふえ、植林したヒノキなどの新芽を食い荒らし、最近では畑の桑やマメにまで手を出すようになってきているということです。あらゆる手だてを講じても防ぎきれず、山の人々は造林意欲を失って、山を捨てざるを得なくなっているそうです。山の人々にとっては、まさに死活問題ですがそれでもカモシカを撃つことはできません。なにしろ相手は、もはや単なるケモノではなく、「特別天然記念物」なのですから。カモシカはたしかに「保護」されまし

た。しかし山林も山村の人々の生活も「破壊」されかかっています。それらの人々を誰が「保護」するのでしょうか。

これは不幸な例ではありますが、自然保護運動が、主として都市生活者によって組織されていて、国民のなかのごく少数でしかない山村の人々——彼等こそ国の緑を守り土を守ってきた人々であるのに——の意見は無視されてしまっていることもあるように思われます。彼等には、都市生活者のように、破壊とか保護とかいう考え方はありません。ただ、昔から何十年も何百年も守ってきたことを黙って続けているにすぎません。老木は伐って利用することで残りの木の成長を助け、風倒木や流木は取り除き下刈り、枝打ちなど、適宜手を入れることを決して怠りません。必要ならケモノも殺すでしょう。そこには、自然の摂理があり自然と共存し、死ねば土に還って自然と同一化する、人間本来の生き方があります。

私事になりますが、私が「樹」という季刊の雑誌をはじめて約一年半になります。発刊以来、朝日新聞はじめ多くの紙誌が取りあげて賞めて下さったので、全国でかなりの読者数（まだ充分ではありません）を獲得することができました。毎号、樹木を描いている著名な画家を一人ずつ特集するほか、樹についての詩、エッセイ、評論

- 創刊号 特集 ■ 駒井哲郎の「樹」
第二号 特集 ■ 野見山勝治の「樹」
第三号 特集 ■ 田淵安一の「樹」
第四号 特集 ■ 横山操の「樹」
第五号 特集 ■ ルドンの「樹」
第六号 特集 ■ 加山又造の「樹」(予定)
第七号 特集 ■ 小野竹喬の「樹」(予定)
第八号 特集 ■ 速水御舟の「樹」(予定)
サイズ・A5変型
表紙・サール紙3色刷、フランス装
本文・特選上質紙約80頁、上製本
部数・限定三、〇〇〇部
頒価・各号二、五〇〇円(十二五〇円)
第一巻一―四号セット(愛蔵函入)
一、〇〇〇円(半共)
第二巻五―八号予約(愛蔵函共)
一、〇〇〇円(半共)

取扱店(北海道地区)

- 紀伊國屋札幌店・丸善札幌店・
三省堂札幌東急店・明正堂札幌
そごう店・なにお書房グランド
ホテル前店・旭川三省堂西武店
なお北海道自然保護協会事務局
でもお取扱い載いております。
品切れの際は直接小社へ。

書房「樹」

東京都杉並区堀ノ内一六―十三
電話 〇三―一五一七四二―一六六

民話などを豪華執筆者に依頼し、装本紙質も最高のものにして、小型ながら中味の濃いやものを心掛けているつもりです。広告も載せず、コストをかけすぎたため、少々値の張るものにはなりましたが、それなりの評価は得ております。「樹」という誌名は自然と人間の接点としての「樹」というものを通して、自然のこと、人間のこと、文化、文明の意味など、いろいろなことを考えてみたいということでした。

詩(文学)や絵(美術)を論じて文化を云々し、文明を批判するなど、まさに嬉々たる斧であり、なに程のことが出来るものかと嗤う人々もいます。また、美など感じなくとも生きて行けるし、文化ではメシが食えない、儲からないという人々もあります。さらにまた、食えてはじめて文化を云々すべきで、食えないのに自分のやりたいことをやるのは生意気であり、間違っているという人々もいます。いずれの意見にも私は謙虚であります。ただどうしても言いたいことは、われわれが文化や文明の意味を見失ったところから自然破壊が始まったのではないかとということです。そして文化や文明を見直すことが、自然(環境及び文化遺産を含む)とはどういうものであり何が「破壊」で何が「保護」かを考える指標になるのではないだろうかということです。

いま人々は自然が失われたと歎いています。しかし、失われたのは環境としての自然だけではなく、むしろ心の中の自然ではないでしょうか。自然を感じ、自然と対話する心の基盤が失われてしまったのです。それを先ず取り戻すことが、やがて自然を取り戻すことにならない筈はありません。ちょうどこの原稿を書いている時、新聞(十一月十九日朝日新聞朝刊ひととき欄)に、初老の主婦の投稿がのっていました。

その土地の旧家なのでしょうか、三本の大きなケヤキがあり、近所から苦情がくるというのです。落ち葉の掃除が大変だ、強風の日などゴウゴウと鳴って恐ろしい、台風で倒れたら……。近所とは、都市化の波であとから勝手にこの土地に軒を並べた家々なのです。また別の話のついでに。やはり大きなケヤキのある家の近くに小学校があって、校庭にたくさん葉が落ちる。PTAの役員たちが、子供たちが毎日掃除するのが大変だから切ってほしいと、その家に申し入れたそうです。春の芽ぶき、夏の緑蔭、冬枯れの細やかな枝ぶり、それらを眺め、そして落ち葉を掃くのも一つの情操教育であらうにと、その人は歎いておりますが、そのような親たちに育てられる子供たちはいったいどんな人間になるのでしょうか。

ついでながら私は札幌市の出身であり、久しぶりに訪れた札幌の市内から、懐かしいポプラの原木が殆ど姿を消しているのに気づき友人に問うたところ、老化して風倒の恐れから伐られたとのことでした。道庁の池の廻りにも大木があった筈だが見ると左側の馴染みのポプラはすでになく、右側の方に低いポプラが少し残っていました。近寄ってみると高さのわりには幹が太い。不思議には思いましたがその時は解らず、あとになって知人からその訳をきかされて驚きました。高すぎるということ、梢をちょん切られたということです。高すぎるということが、風倒の恐れありということなのか、新庁舎の美観を損ねるといことなのか、意味不明であります。とにかく一役人の命令で頭の方を切られたというのです。おそらく堂垣内さんも知らないことなのでしょう。その人もあとから話をきき、あいた口がふさがらなかつたということです。

前のケヤキの話といい、このポプラの話といい、こういことが大したことではないと問題にもされない世の中では、自然だの、人間だの、文化だの、文明だの、そんな本を作っているとも思うように売れる筈がないと、少々諦観気味の昨今であります。